博士論文（要約）

カラーチーの「ベンガリー」

―D 地区の「路上」から考える「女の子の安全保障」―

小野　道子

本研究は、パキスタンのシンド州の州都であるカラーチー市の人口の 10%以上を占めるものの、政府統計などには表れない「ベンガリー」と呼ばれる人々に着目した。「ベンガリー」のうち大多数は、現在のバングラデシュ（1971 年 12 月のバングラデシュ独立までは東パキスタン）出身のベンガル人ムスリム（以下ベンガル人とする）であるが、ミャンマーのアラカン地方（現在のラカイン州）出身のムスリム（以下バルミー／ロヒンギャとする）も 25-35 万人程度含まれている。

本研究の目的は、「路上」で物売りや物乞いを行っている「ベンガリー」（ベンガル人およびバルミー／ロヒンギャ）の女の子たちの安全保障について考察することである。パキスタンやバングラデシュなどイスラーム圏南アジア諸国においては、女の子や女性にとって安全な場所は家であると考えられることが多い。そのような状況において、女の子や母親たちがなぜ「路上」に出てくるのかという問いを立てた。先行研究では、女の子が「路上」に出てくる理由として、貧困や生活困窮が挙げられてきたが、本研究では、女の子たちや同行する母親たちが「路上」を安全・安心な居場所としても捉えているのではないかと考えた。彼女たちが安全や安心をどのように考えているのかを聞き取り、「路上」に出てくる理由について検証することで、「人間の安全保障」概念を応用した「女の子の安全保障」がどのように達成されるのかを考察した。

序章では、「ベンガリー」とは誰を指すのか、なぜ「ベンガリー」に着目するのか、「ベンガリー」の中でも「路上」に出てくる娘と母になぜ焦点をあてる必要があるのかなど、研究の背景について述べた。

第 1 章では、1)「人間の安全保障」における子ども、特に女の子に着目した安全保障の研究、2)カラーチーの「ベンガリー」ディアスポラ研究、3)「路上」で働く子どもの研究について、それぞれの視点から先行研究を整理し、本研究における分析視角を提示した。さらに、本研究の意義、研究の目的、研究の方法（調査期間、調査対象地域、調査対象者）、本論文の構成を提示し、本論文で使われている用語について説明した。

第 2 章では、本研究の理論的枠組みとなる「人間の安全保障」論において、研究のキーワードとなる個々人の安全や安心がどのように扱われているのか考察した上で、「女の子の安全保障」学の可能性について検討した。まず、「人間の安全保障」とは何か、国際社会において、「人間の安全保障」論がどのように発展したのか概観した。次に、個々人の安全・安心という観点から、「人間の安全保障」研究に対してどのような批判が行われてきたのか、どのような可能性が見出されるのか考察した。特に、これまで「人間の安全保障」研究において焦点があてられてきた脅威や不安全への着目ではなく、安全・安心に着目する必要性、安全・安心を基盤にした個々人の視座に基づくウェルビーイングを研究するためには、人類学や社会福祉学をベースにした研究が欠かせないことを指摘した。最後に、子ども、特に女の子を対象とする「女の子の安全保障」学の可能性を提示し、第 3-5 章の「ベンガリー」ディアスポラの状況分析、第 6 章のカラーチーの D 地区 G マーケット周辺の「路上」での現地調査結果を踏まえた第 7 章の考察において議論するための概念整理を行った。

第 3 章では、英領インド時代から 1990 年代後半に焦点をあて、パキスタン、バングラデシュ（旧東パキスタン）、ミャンマーのアラカン地方における国内および地域状況の変遷を踏まえ、ベンガル人やバルミー／ロヒンギャのカラーチーへの移住の過程を明らかにした。カラーチーの「ベンガリー」ディアスポラは、主に 1960 年代から 1990 年代後半にかけて形成された。インド・パキスタンの分離独立後、特に 1960 年代以降、経済成長が著しかったカラーチーへ仕事を求め、単身または家族で移住するベンガル人が増加した。1971 年のバングラデシュ独立前後、ベンガル人の多くがバングラデシュに帰国したものの、パキスタンに共感を持っていた人々、独立後の国内の

経済不安や頻発する災害などによって生活が苦しくなった人たちなどが、再びパキスタンに移住した。バルミー／ロヒンギャの人々も、1960 年代以降、アラカンでムスリムへの迫害が激しくなったことや生活困窮が原因で、家族や親族でバングラデシュを経由してカラーチーに移住してきた。1990 年代後半以降は、人身取引問題の顕在化などで、インド・パキスタンの国境管理が厳重化し、移住者は激減した。センサスや文献からの客観的データと筆者が現地調査で収集した「ベンガリー」の人々の「語り」（ベンガル人男女 59 名、バルミー／ロヒンギャ男女 31 名、ベンガル人の子ども 8 名にインタビューを実施）が交錯するところから紡がれる、これまで注目されてこなかったパキスタンにおけるベンガル人やバルミー／ロヒンギャの人々の移住の歴史を描いた。

第 4 章では、カラーチーの「ベンガリー」の現在の暮らしと市民権をめぐる人々の交渉について論じた。現地調査で収集した「ベンガリー」の人々の「語り」を導入しながら考察し、第 5 章以降で扱う「路上」で物売りや物乞いをおこなっている子どもたちの背景を明らかにした。本研究が対象とする「ベンガリー」のうち大多数の人々は、カッチー・アーバーディー（スラムとスクォッターの両方を意味する）と呼ばれる地域に居住している。カラーチーの「ベンガリー」居住地がいつ頃からどのように形成されたのか、その成り立ちや居住地の住環境、また、人々の生計手段、教育、医療、社会保障へのアクセスなど、「ベンガリー」の日々の暮らしについて論じた。「ベンガリー」の中には、無国籍の状況にあり、先の見えない暮らしを余儀なくされている人々も多い。カッチー・アーバーディーでの生活は、政府による取り壊し、市街地から遠く離れた場所への移転、意図的な火災、本来の土地の所有者と名乗る人たちによる恐喝など確実で安心できるものではない。市民権を保証するはずの CNIC（Computerized National Identity Card）と呼ばれる身分証やパスポートも、一度手に入れれば安泰ではなく、更新年のたびに出生証明書などの書類を用意し、賄賂を支払う必要が生じることもある。選挙や政権交代によって CNIC 取得の条件が変わる場合もあり、変化する情勢を見極めながら、CNIC の取得や自分たちの生活基盤を強固なものとするためにできる最善のことを行いながら、より良い暮らしを求めていく人々の姿がある。

第 5 章では、「ベンガリー」の中でも、「路上」で物売りや物乞いを行っている子どもたちについて考察を深めた。国際的な文脈での「ストリート・チルドレン」という言葉の変遷を追い、「ストリート・チルドレン」という外からの名付けを批判的に検討しつつ、パキスタンにおける「路上」の状況にある子どもたちについて概観した。カラーチーの「路上」で働く／生活する子どもたちの実態については、包括的な調査が実施されておらず状況を把握することが難しいため、過去に NGO などによって実施されている調査結果から分析を行った。NGO などの調査では、男の子は、家庭内暴力や親の再婚による家庭不和などを理由に家出のような形で「路上」に出てくることが多い。その一方、女の子は、家庭の生活困窮のために仕方なく「路上」に出てくることが多いことが指摘されている。筆者がカラーチーで修士論文執筆のための調査を行った 2008 年と今回調査を実施した 2017 年から 2020 年にかけての「ベンガリー」の子どもたちを取り巻く「路上」の変化については、NGO 職員や以前「路上」にいた青年たちへの聞き取りからも考察を行った。「路上」で働く子どもたちを保護するパキスタン政府及びシンド州政府の政策や法律、NGO などによる支援の取り組みについても概観した。

第 6 章では、カラーチー市内の D 地区 G マーケットや近くの交差点で物売りや物乞いを行っている「ベンガリー」の女の子 20 人と男の子 6 人、その周囲で見守りや監視を行っている母親たちやその他の女性たち 19 人に対して行った調査方法、結果を提示し、調査結果を分析した。調査結果から、なぜ D 地区の「路上」に女の子と母親という組み合わせが多いのかが明らかになった。D 地区に出てくる母親は、夫が死亡または夫と離婚している、夫がいても働ける状態になく（病

気や薬物常習など）外で働ける年長の男の子もいない女性世帯主家庭が多く、貧困や生活困窮ゆえに仕方なく「路上」に出てきている。男の子には「路上」以外にも働ける場所があり、家の近所など外で過ごせる場所もあるが、女の子は家で留守番することも安全ではなく、家の外には居場所がないため、母親が「路上」に連れてくるしかない。D 地区に通うようになった理由は決してポジティブなものではないものの、D 地区に長年通っている子どもや母親たちは、D 地区に来ることで生活困窮を脱し、G マーケットの「路上」が心の居場所やセーフティ・ネットとして機能している事例も見られる。イスラームのパルダ（女性を公的空間から隔離する社会慣習）のため、近所を自由に出歩くことができない女の子たちや母親たちも、D 地区 G マーケット周辺の「路上」では、他の子どもたちと遊んだり、レストランの男性店員と話すなど自由な振る舞いも一定程度許されている。D 地区に通う母親や娘たちの中には、D 地区の「路上」で得た人間関係で BC（Ballot Committee：頼母子講）グループを作り、BC 資金で家電を買ったり、夫や父親の商売に投資したり、家を購入するなど、資産を増やして生活困窮から脱している人たちもいる。

第 7 章では、第 2 章から第 5 章までの考察や分析と第 6 章の現地調査の結果と分析を踏まえ、なぜ、「ベンガリー」の女の子や母親たちが「路上」に出てくるのかという問いに立ち返り考察を行った。1)「ベンガリー」という名乗りと名付け、2)「ベンガリー」の女の子や母親たちにとって「路上」が意味するもの、3)安全・安心な居場所としての「路上」という 3 つの観点から、「ベンガリー」の「女の子の安全保障」についての考察を深めた。さらに、ミシェル・ド・セルトーによる「戦術」と「戦略」の概念を援用して、「ベンガリー」の人々が「戦略」を策定する政府にだけ期待するのではなく、様々な「戦術」を用いて、「人間の安全保障」を自ら作り出している状況を明らかにした。パキスタンにおいては、CNIC を取得していない人々は非市民として扱われ、パキスタン政府による保護の対象となりにくい。そのため、人々は、「ベンガリー」という名乗りや名付けを巧みに利用して、様々なアイデンティティをうまく使い分けながら、日常を生き延びている。特に、バルミー／ロヒンギャの人々は、ベンガル人を装って CNIC を取得するために「ベンガリー」を積極的に名乗る傾向にある。「ベンガリー」の女の子や女性たちが D 地区の「路上」に出てくる理由は、最初は食料の不足など生活困窮によるものであったが、公的空間である「路上」をうまく利用して、安全や安心な居場所を自ら作り出している。研究者、NGO や行政などが「路上」と呼ぶ場所は、彼女たちにとっては「路上」ではなく、D 地区 G マーケットという固有名詞で呼ばれる日常的な居場所として変容している。彼女たちは「ストリートに行く」のではなく、「D 地区に行く」のであり、「ストリート・チルドレン」という呼び名は彼女たちには当てはまらない。国家による保護がなく、地域社会や親族からの保護も十分に得られない「ベンガリー」の女の子や女性たちは、D 地区で信頼できる人間関係を作り、仕事や賃貸物件などの情報交換や BC による貯金や投資を行うことで生活をよりよくしている。ド･セルトーの言うところの「戦術」を用いて、D 地区の「路上」に集まる同じ境遇の仲間たちと「安全共同体」を作ることで女の子の安全が保障される状況を作り出している。

終章では、本研究の結論と学問的貢献および政策的示唆をまとめた上で、本研究の限界と今後の研究の必要性についても言及した。D 地区の「路上」に集う「ベンガリー」の女の子や女性たちは、保護の必要な「脆弱な」受け身の存在に甘んじているだけではなく、自ら安全や安心を獲得するために「戦術」を用いて主体的な働きかけをおこなっている。「人間の安全保障」研究においては、欠乏や不自由など「脆弱な」人々の生活において充足されていないものが中心に議論され、保護やエンパワーメントの必要性が語られることが多い。しかし、本研究では、女の子や女性たちがすでに持っているものを活用した「戦術」（ド・セルトーは「弱者の技」とも言い換えて

おり、ジェームズ・スコットが言うところの国家の隙をつく「土着の知恵とノウハウ」でもある）が「人間の安全保障」や「子どもの安全保障」を可能にしているという逆説的な考え方もできることを提示した。本研究によって示された結論は、「路上」で物売りや物乞いをおこなっている女の子たちすべてに当てはまるものではない。しかし、「路上」で物売りや物乞いをおこなって生活している女の子たちやその母親たちが、国や地域の保護を期待できない状況において、自ら安全・安心な生活の場を作り出そうとしている姿は、D 地区の「路上」だけに限定されるものではない。

本研究の学問的貢献は、1. 南アジア地域研究におけるパキスタンの「ベンガリー」ディアスポラ研究への貢献、2. 文化人類学の視座から考える「路上」への新たな視点、3. 「人間の安全保障」、「女の子の安全保障」の視座から考える安全・安心な居場所の 3 点に集約される。本研究による政策的示唆としては、1. 「ベンガリー」への支援：「安全共同体」を増やすことでのセーフティ・ネットの構築、市民団体との協働の必要性、2.「路上」で物売りや物乞いを行う「ベンガリー」の子どもたちへの支援：居住地であるカッチー・アーバーディでの予防的な子ども支援活動と教育や社会サービスなどにおける質の向上の必要性を提示した。

本研究の限界と今後の研究の課題としては、1.「ベンガリー」ディアスポラ研究の課題：いくつかの「ベンガリー」居住地域を選定し、より詳細な調査の必要性、2.「路上」で物売りや物乞いをおこなう子どもたちの研究の課題：生活を好転させる前に途中で「路上」をドロップアウトした子どもや母親への継続調査と D 地区に通い続けている子どもや母親とさらに醸成された信頼関係を築きながらの長期的調査の必要性が挙げられる。本研究では 2 年間弱という短期間での子どもたちの成長を追うことしかできなかった。今後、子どもたちが D 地区の「路上」以外にどのような居場所を見つけていくのか見守っていきたい。